一頁随想 わが旅 552

■提供/株式会社 ツムラ

私のお薦めのニューオリンズ

横浜市立大学大学院消化器病態外科学 教授
嶋田紘（しまだ ひろし）

卒業して36年、私の海外旅行と名乗ってよいものは新婚旅行の一度だけだ。後は全て学会の為の出張になる。それも居場所は飛行機、ホテル、学会場の三点セットで長くても三泊四日又は五日の旅行である。とても心に残る思い出作りは難しい。

そんな私が「わが旅」の原稿を依頼された。何とかして思い返し最初に浮かんだ町がニューオリンズだった。アメリカ南部ルイジアナ州、ミシシッピー河口に開けた町、少年時代に誰もが胸躍らせたトム・ソーヤの冒険、あの少年たちが夢中で追いかけた蒸気船の羽根車が今でも豊かな川面を回転している町だ。昨年、私は日本で25年振りに開催された世界消化器外科会議を主催した。その開催準備と報告の為に二度続けて訪問をした事に加え、アメリカでもめずらしく家庭的な町という印象が残っているためと思っている。

初回は昨年の5月、降り立った時約18時間の長旅にも拘わらず疲労を感じなかった。その理由は空港がこぢんまりとしている事、気候が日本と似ていて湿気もあり緑も豊かな事が関係していたように思う。ホテルで娘と落合い明日は早朝から会議ということで早々に夕刻の町へと足を向けた。

旅案内通り、町の中心フレンチコーターは、ジャズの音と人々の歓声に満ちて、ふと何年か昔の故郷の祭りの宵に居る錯覚に襲われた。よほどの路地裏へでも入らない限り安全と思われる町を巡ってから名物の生牡蠣屋（アクメオイスターハウス）の列に並んだ。旅先では珍しい「うまい！」「安い！」を連発しながら我々は、生牡蠣3ダース、ザリガニ山盛2皿を平らげた。フランス、スペイン、そしてアフリカなど多くの文化が入り混じり生み出したこの土地の味付けを感じながらアメリカでもめずらしく長居が出来そうな土地であるように思われた。

翌朝は6時にミシシッピー河岸までのCanal Stを娘とジョギングを楽しんだ。その羽根車を朝日に輝かせて蒸気船は停泊している。観光地の喧騒が訪れる一時前の静けさだ。トム・ソーヤの気分と数ヶ月後に迫った世界会議主催への思いが入り混じり、体中を何かが走りぬけていった。

後の2日間、妻と娘は200年の歴史を持つフレンチマーケットで安い掘り出しものをみつけ、高価なアンティークを楽しみ、奴隷制度盛んな頃の大地主の館で「風と共に去りぬ」を満喫したようだ。妻によれば町には見慣れた植物が多く、特に百日紅の街路樹は印象深かったという。

2度目の旅行は私も日中に時間がとれ珍しく観光が出来た。生憎の雨であったが2ドルの合羽で1856年のニューオリンズの激戦で一躍英雄となった、アンドリュー・ジャクソンのジャクソン公園を巡り、名もない歌手のジャズに聴きほれながらランチをとった。この街の歴史の中心となる仏からの独立調印の場である博物館（The Cabildo）でナポレオン・ボナパルトのデスマスクに感激するなどアメリカ史にふれる貴重なときを過ごした。

昨年の旅は英語が得意な娘が何かと便宜を図ってくれたこともあり大変リラックスできた。今はアメリカなら歴史と食べ物を楽しめるニューオリンズがいいよと知人に薦めている。

原稿を書き終えた後、ニューオリンズがハリケーンによる洪水のため大被害を受けた。一日も早く復旧することを心より願っている。